

ってくるので、生産数量の根拠について説明する必要があると思われる。

1) 生産数量の根拠

表-3に示すように、1母当り生産原価は鹿見島方式で小さく、施肥方式でもっとも大きい。しかしその差は小さくすべて3,000円台である。このことから逆に、3,000円台の生産原価を維持するためには、鹿見島方式では50トン、給餌方式では5トン、さらに施肥方式では1トン台の生産が必要であると言うことになる。

すなわち鹿見島方式では50トン以上の生産が経営規模であって、それ以下では経営は成り立たないと言う目安の数量である。今回の試験結果で明らかなように施肥方式では、この池における生産限界数量が1トンであって、生産原価をさらに低減するためにこれ以上生産量を伸ばすことができないと言う意味の数値である。

築堤による給餌方式については年生産0.3kg/m²が先進地の例では報告されているので、この池においても年生産1.5トンが将来は実現できるかも知れない。しかし現時点における施設や経営能力からすれば一応5トンの生産が限度であると考えられる。

表-3 養殖方式による収支見込と必要運転資金

養殖方式 科目	鹿見島水試の		久米島における	
	陸上方式※-1	給餌方式※-2	自然餌料が 増われる。	施肥方式
餌代	1,400yen	餌料効率2	1,400yen	350yen
電力料	400	200		200
人件費	200	400	1人は常備	800
出荷販売費	590	800		800
種苗費	60	120	池1800m ² ×1/30	120
償却費	222	200	ポンプ 200m ² ×1/5	1,000
金利	100	100	100m ² ×1/5000	100
その他	100	100		100
計	3,072yen/kg	3,320yen/kg		3,470yen/kg
総生産量/年	50トン	5トン		1トン
1m ² 当り 量kg	25	0.1-0.2/year		0.02-0.04/year
最少限の	2850×50000×1/2	3120×5000×1/2		2470×1000×1/2
必要運転資金	-71250000yen	-7800000yen		-1235000yen
クマエビ1kg当り※-3	928	680		530
利益	928×50000-46400	680×5000-3400		530×1000-530

※-1 鹿見島水試「うしお」47.4から ※-2 施肥方式を半ばとり入れた給餌方式で

※-3 販売額は¥4,000/kgとする。 ある。